
スクールライフ

宵月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スクールライフ

【Nコード】

N8444F

【作者名】

宵月

【あらすじ】

私立劉曹孫高校2人に通う秋月春一。彼のスクールライフは恋に笑いに涙と青春が盛りだくさん(?) そんな彼の高校生活を描いた物語。

Episode 1：始まりはただの日常

「ねえ、春一ってば。さっさと起きてよ」

聞き慣れた声を覚醒しきらない状態で聞きながら俺は体を揺すられていた。

俺を起こそうとしてくれている人は我が幼馴染の新藤 瑞穂だ。

「頼む、あと3分ぐらい待ってくれ」

お約束とでもいうべき俺の台詞に瑞穂は駄目だと言って体を揺すり続ける。

最初は無視していたが俺自身の揺れに加えベッドの揺れを加わり吐き気を感じ俺は起きることにした。

自慢ではないが、すぐに酔ってしまうタイプなのだ。故に乗り物は嫌いだ。

「やっと起きてくれた。おはよう春一」

「ああ、おはよう。瑞穂、いつもありがとう」

「いきなりどうしたのよ。いつもはお礼なんて言わないくせに」

「理由はない。本当になんとなくだ」

俺の一日はほぼ瑞穂に起こされることで始まっている。

我が両親は忙しく海外を飛び回り大事な一人息子をほったらかしにしているのだ。

今はさすがに慣れているが、まだ幼き頃はそれなりに寂しかったものだ。

でも、お隣に住む秋月家がいろいろと構ってくれたので大丈夫だった。

特に瑞穂は同い年というだけあって、仲良くなり俺によく構ってくれる。

それが影響してか朝にとっても弱い俺をわざわざ起こしに来てくれるのだ。

その為、瑞穂は我が家の合鍵も持っているのだ。

「とにかく早くしてよね。学校に遅れちゃうよ」

「そういえば今日は月曜日か。どうして休日はこんなにも短いんだ」

「そんな事言っでないで、はやく準備しないと。朝ごはんを食べれないよ」

「うつ・・・。それは大変だ。じゃあ着替えるから出て行ってもらえるか」

「なんか面白そうだし見とく」

「はっ？瑞穂、頭でも打ったのか？それとも悪いものでも食べたか？」

「冗談に決まってるじゃない。下で待ってるから早くしてね」

「了解。1分足らずで着替えてやるよ」

「別にそういう宣言はいらない。じゃあ、また後でね」

瑞穂はそう言う俺の部屋から出て行った。

俺はそれを見届けてからさっさと制服に着替えた。

朝風呂に入りたいところだが如何せん時間がないのだからしょうがない。

もっと早く起きればいい話だが、自分ではなかなか起きれないのだ。

着替えを終えて下の階のリビングに行くとソファに座りながら瑞穂がテレビを見ていた。

俺の家では当たり前とでもいうべき光景で決まって瑞穂はニュース番組を見ている。

ちなみにニュース番組といってもこの時間は占いをやっているのだ。大の占い好きの瑞穂は毎朝これを見るのを日課としている。

ちなみに瑞穂の占い好きは以上で、有名な占い師にあの人と結婚したほうがいいと占いされたら、今までその人が嫌いだったとしても結婚しようとするかもしれないほどだ。

「相変わらず好きだな。占い見るの」

「うん。だって高順位だったら一日が楽しくなるじゃない」

「低順位だったら嫌にならないのか？」

「そういう時はね、不運なんて吹き飛ばすほどに明るく生きればいいの」

「へえ、何か凄いポジティブだな」

「いいの。ポジティブが悪いことではないんだから」

「それはそうだけどさ」

俺はそう言いながら前にあるテーブルに手を伸ばし弁当箱を手にした。

この弁当箱には瑞穂のお母さん作の料理が入っていて俺の朝ごはんとなる。

毎日、作ってもらっているわけで、俺はとっても感謝している。

故に俺はおばさん（瑞穂のお母さん）には頭が上がらない。

ちなみに瑞穂も俺と同じように弁当箱に入れてもらい俺の家で朝食をとっている。

朝食を終えた俺達はテレビや電気の明かりを消し家を出た。

ちなみに省略はしてあるが、俺は顔を洗ったり歯を磨いたりという事はしている。

家を出た俺達は最初に瑞穂の家と行きおばさんに弁当箱を渡し学校へ向かった。

俺達は2人そろって私立劉曹孫高校に通っている。

名前で気づいた人もいるだろうが、この学校の創設者は三国志をこよなく愛した人だったらしい。

余りにも愛するが故に劉備、曹操、孫権の3人から一文字ずつ借った学校名をつけたらしい。

噂ではあるが諸葛亮孔明からも一文字取ろつか迷ったとかいうどうでもいい話もある。

まあ、1つだけ言えることはセンスのない名前である・・・。

しかし、そのセンスからは考えられないほどに人気は高い。

なぜなら県内屈指の進学校であり、私立校のくせに学費がかなり安いのだ。

俺は当初、行くつもりはなかったが瑞穂に半ば強制的に受験させられた。

俺は最小は渋ったが結局は折れた。お世話になってる分、これぐらいはするべきだと思った。

まあ、そんな訳で俺はこの生徒をやってるわけだが、残念ながら成績は学年最下位争いだ。

ちなみに幼馴染の方は学年トップクラスだ。我が幼馴染ながら素晴らしい。

「ふう、今日はギリギリセーフだったな」

「正確に言つと今日もね。春一がもう少し早く起きてくれれば余裕で間に合うんだけどね」

「それは無理な注文だな。悪いが許して欲しい」

「別に期待してないけどね。言ってみただけ」

「さすが我が幼馴染。良く分かってくれているよ」

そんなどうでもいい様な会話をしているとある男の声が教室に響いた。

「お、今日は夫婦そろって登校だ。毎日、毎日ラブラブだねえ。俺、妬けちまうよ」

「幸人、お前はいつもいつも疲れないのか？そんな事ばかり言っ

「うるせえ。毎日、彼女を横に連れて幸せそうなお前に言われたくねえ」

「何度も言ってるけど、瑞穂は彼女じゃない。いらん嫉妬をするな気持ち悪い」

「気持ち悪いだと。そう言った方が気持ち悪いんだ」

とりあえず、しかとしよう。思考回路が小学生低学年の奴と会話をしていると疲れてくる。

「おい、春一しかとかよ。お前、友達をしかとするなんてどういうつもりだよ。新藤さんも何か言っ

「えっと、ごめんね武藤君」

ちなみに武藤とは幸人のことである。

「えっと、そこで謝られるとかなり困っ

「うん、ごめんね」

「いえ、もういいです。そして、こちらこそごめんなさい」

騒いでいた幸人も静かになり教室にやっと静けさが戻ってきた。

やっぱり朝は静かなほうがいい。幸人の声はもう何というか騒音だ。俺がそんな事を思うと同時に学校の鐘が鳴り響いた。

それを合図にするかの様に皆、自分の席へと戻っていった。これから進学校らしく0時間目の始まりだ。

まあ、俺にとっては睡眠時間にしか過ぎないわけだけど。

Episode 2…いついつ出会いつてあれに似てる

0 時間目が終了する約 10 秒前、俺は体内時計の目覚ましを利用して目を覚ます。

しつかり 10 秒後に授業の終わりを告げる鐘が鳴り響き先生は教室から出て行った。

前々から思っていたが俺の体内時計は既に神の領域ではないのだからか？

朝もこうやって起きればいいのだが、無理なことは無理だ。

それにそんな大変なことをしなくても、我が幼馴染が起こしてくれるのだ。

俺がそんなくだらない事を考えていると隣の奴が俺に話をかけてきた。

「相変わらずきつちり 10 秒前に起きるんだな」

我が友達の相場 修だ。中学から同じ学校でいわば親友という奴だ。

「まあな。自分でもこの正確さにはいつも驚かされるよ」

「だろうな。今では慣れたけど最初の頃は驚いたよ」

「まあ、人間には誰にでも 1 つや 2 つ才能はあるってことなんだよ」「いない才能だけだね」

ちなみに今の発言は修ではない。我が幼馴染の瑞穂だ。

「瑞穂、お前はいきなり話に加わったと思ったたら何なんだ一体？」

「別に何でもないけど」

「俺の大切な才能を馬鹿にしゃがって。それでも幼馴染かよ」

「大切な才能ってそれが？朝起きるときに機能してくれたら認めて

もいいけど」

「ぐっ……。痛いところを突きやがって。修、お前も何か言っ
てやってくれ」

「悪いな、春一」

何だ……。このさっきの幸人と同じ扱いは……。

「お前はとうとう俺と同じランクの人間になったわけだな」

「うっさい。お前は話に入ってくるな幸人。とりあえずどっか行っ
てくれ」

「そんなに怒るなって。本当は嬉しいだろ、俺と同じランクになれ
て」

「でもさ、正直に言つとさ春一と幸人って前から同じランクじゃな
い？」

修の野郎……。いらない事を言いやがって。

「確かにそうだな。毎回、ビリ争いは俺達二人だしな」

ちなみにこれはテストでの順位のことだ。俺がいつも下から2番目
で幸人は言つ必要もないだろう。

「ビリ争いと言っても俺達の間には結構な差があるんだよ」

「そう？ 私はあんまりないと思うけどな。200点台って二人だけ
だし」

今度は瑞穂か。どこまで俺を幸人と近づけたいんだ。人生の汚点に
なってしまう。

ちなみに補足だがテストの満点は900点である。

「もういい。次のテストで証明してやるよ。俺とお前が違うつてことをな」

「それはさせないぜ。次のテストでは俺の名前が上になってるからな」

こいつ本気で言ってるやがる。こんな奴に俺は下に見られてるのかよ・・。

「まあ、お互い頑張ろうぜ。落ちこぼれ同士さ」

「もうどうでもいい。そろそろHR始まるし席に戻れ」

「それも、そうだな。それじゃあまた後でな」

そう言ってる幸人は自分の席へと戻っていった。

瑞穂と修もそれに続くようにそれぞれの席に戻っていった。

とは言っても、二人とも俺の隣が席になっているから1秒足らずで戻るわけだが。

HRが終わり10分後には一時間目の英語が始まっていた。

さすがについさつき一時間近く眠った俺はこの時間は眠ろうと思えなかった。

割と英語は好きだったりするので結構真面目に受けるつもりだったりもする。

まあ、好きでも出来ないのが残念なところという奴だ。

「ねえ、春一」

突然、隣に座る瑞穂が小さな声で俺の名前を呼んできた。

授業中に話しかけてくるなんて珍しいなと思いながら俺は瑞穂の方

を向いた。

「どうしたんだ？授業中に話しかけるなんて」

「今日、教科書忘れたみたいなの。一緒に見せてくれない」

「教科書忘れるなんて学校に何しに来てるんだよ。呆れるよ」

「毎日、置き本してる春一にそんなこと言われたくない」

「ごもつともだ。しかし、簡単に引き下がる俺ではない。」

「だけどなあ、さっき俺のことを散々に言いやがったよな」

「私を脅すつもり。明日から起こしてあげないし朝食も持ってこないよ」

「スマン。調子に乗って悪かった」

「分かればいいの。じゃあ見せてくれるんでしょ？」

「ああ、よろこんで。なんだったら教科書を貸してやるつか？」

「それはいいよ。春一が勉強できないじゃない」

「そっか。まあ正直に言えばやった所で何も変わりはないけどな」

「そうかもしれないけど、ちゃんとやった方がいいでしょ」

「分かったよ」

俺の返事を聞いてから瑞穂は自分の席を俺の席へと寄せた。席がくっついてから俺は中央に英語の教科書を置いてやる。

瑞穂は俺にお礼を言ってから授業の世界へと戻っていった。

俺はというと、適当にあたりを見渡して後ろを向いている幸人と目が合った。

幸人はニヤニヤ気持ち悪い顔をしていてぶん殴りたくなったのであとで殴ることにした。

1時間目も終わりそのまま2、3時間目の授業も過ぎていった。
まるで瞬く間に終わったという感じだったが実際はかなりしんどかった。

まあ、これから昼休みなわけだし、そういうことは忘れることにしようと思う。

「春一、さっさと購買に行こうぜ」

いつも通り、修が購買に行こうと誘ってくる。

俺は適当に返事をして鞆の中から財布を取り出し修と教室を出た。

「今日は何を食べようかなあ」

「修はいつもそういうけど、必ずメロンパンとカレーパン買ってるじゃん」

「いや、今日こそは変えることにする」

「あつそ。その台詞も毎日言ってるけどね」

そんな会話をしながら俺達は購買へと辿り着く。

俺達以外にも購買を利用する人は多く、結構な混雑具合だ。

「よし、春一いつも通りジャンケンと行くか」

「おう。言っとくが負けるつもりはないからな」

ちなみに、このジャンケンはどちらが買い物をするかというジャンケンだ。

買ったほうがすぐその販売機で飲み物を買って負けたほうは購買に

並ぶ。

言うまでもないが負けると結構な人込みに並ぶので辛かったりする。

「それじゃあ一発勝負だ。ジャンケン、ポン」

ポンの部分と同時に俺達は互いに自分の技(?)を繰り出す。

俺がグーで修はチョキだ。どうやら俺の圧勝に終わったらしい。

「げっ、まじかよ・・・」

「神は俺に味方したって事さ。じゃあ、俺はタコスで頼む。お前は飲み物は何がいい」

「お茶で頼む。お金は教室で渡しあえばいいよな？」

「大丈夫だ。それじゃあ、頑張ってくれ」

俺は修にそういい残り販売機の方へと向かった。

3つある販売機の中から1つを選びそこから俺と修の分のお茶を買う。

これで俺の仕事は完了だ。なんとも楽なことだろう。勝つてすばらしい。

俺はそんな事を思いながら元の場所に戻ろうと歩き出そうとした。しかし、前に進むことが出来ず何故か俺は後ろに倒れ始めていた。少しすると廊下に尻餅をつき少しの痛みを感じる。

「いつてえ」

「あの、ごめんなさい。急いでたから、ぶつかってしまいました」

前を見ると見知らぬ女の子が俺の前に立っていた。

リボンの色から確認して俺と同級生のようなのだ。

「いや、別にいいよ。周りを確認してない俺も悪かったし」

「その、本当にごめんなさい」

「だから、別にいいって。気にしてないからもう行っても大丈夫だから」

「はい、ありがとうございます」

何に対してのお礼なのかは分からないが彼女はそう言つと走つていった。

俺をその後姿を見送りながらゆっくりと立ち上がった。

何だかベタな恋愛漫画にありそうな展開だったなと思いつながら。

Episode 3：幸せはあっけなく終わりを告げる

購買から帰ってきた俺達はいつものメンバーで集まって昼食をとっていた。

いつものメンバーとは俺と瑞穂と修と絵里菜である。

絵里菜は瑞穂の中学時代からの親友で瑞穂を通して俺や修とも親しい仲だ。

あと、忘れていたがメンバーの中にはおまけで幸人も入っている。

「修は結局、メロンパンとカレーパンにしたのか」

「しょうがないだろ。他に心惹かれるものがなかったんだ」

さっきまでの威勢は一体どこに行ったのだろうか。

俺はそういう突っ込みの思いも込めつつ幸人の頭を殴ってやった。いきなり殴られたことに幸人は理由を求めたが俺はなんとなくだと答えておいた。

「本当に春一と幸人って仲が良いんだね」

この問題ありの発言は絵里菜だ。どうして俺が幸人と仲が良く見えるのだろうか？

「絵里菜、何を言ってるんだ。絶対にそんな事はない。幸人はほとんど赤の他人だ」

「待て春一。それはいくらなんでも冷たすぎる。修、新藤さん何か言ってるやっ」

「じゅめん」

修と瑞穂の声が綺麗に重なる。このハモリ具合は幸人に更なるダメ

ージを与えるだろう。

「そんな、もういい……。ところで皆に相談があるんだけど」
「なんか凄い話の展開のさせ方だな」
「そういう所は気にするなよ修。器の小さい男だと言われるぜ」
「……。で、相談つてのは何なんだ？」

半ば呆れながら修が促した。修、今ならお前も俺の気持ちが分かるだろうよ。

「俺さ、好きな子が出来たんだよ」
「お」

話を聞いてる俺達4人の声が見事に重なる。これはもう芸術だ。

「いつ出来たんだ？詳しく言ってみろ」
「まあ、待て春一。物事には順番というものがある」
「それもそうだな。じゃあゆっくり聞かせてもらおうじゃないか」
「まずは出会いからだな。実を言うとな出会いは昨日なんだ」
「じゃあ、一目惚れって事」
「察しがいいじゃないか、水内。そう一目惚れという奴だ」

誰でも分かるだと心で突っ込みながら俺は先を促した。
あ、ちなみに水内は絵里菜のことだ。

「じゃあ、話してやろうじゃないか。俺と彼女との出会いを」

俺達を期待しながらその話に耳を傾けた。
しかし、次第に俺は何か違和感みたいなのを感じていた。
この感覚は何というべきだろうか？デジャヴと言えば正しいだろう

か。

幸人が話した彼女との出会いは俺が先ほど販売機前で体験した出会いと似通っていた。

ぶつかった人の態度にせよ、その人が同じ学校の同級生ということにせよ、結構かぶる所があったのだ。

俺は話を聞くうちに次第にぶつかった人は同じだと確信し始めていた。

「これが俺と彼女との出会いだ。そして、俺は一目惚れをしたんだ」
「・・・・・・・・」

話を聞き終わった俺達はそろいもそろって無言だった。

さすがに心配になったのかさつきまで笑顔だった幸人があわてた様子になっていた。

「なあ、皆どう思った？俺と彼女の運命的な出会い」

それを運命的な出会いと思ってんのかよ。俺もついさつき出会ったまっただけ。

俺がそんな事を考えていると修が一番最初に口を開いた。

「その、何ていうかさ。幸人がぶつかった相手、俺もぶつかった事があると思う」

「え？」

修の発言に幸人は驚いている。俺も声には出さなかったが結構驚いていた。

そして、もっと驚くべきことが起こる。

「私も、多分その人とぶつかったことがあると思う」

「私もあるよ」

なんと、瑞穂と絵里菜までもが修に同調したのだ。

「幸人、俺もだ。ついさつき購買へ行つたときにぶつかった」

俺達の発言を聞き幸人は相当驚いた顔をしている。

正直、俺も驚いているのだが以外にも他の3人は普通の顔をしている。

「どういうことだ？どうして皆が彼女と運命的な出会いをしているんだよ」

「幸人落ち着けよ。その子な結構学校では有名なんだ」

「え、どういうこと？教えてくれよ修」

「教えるって。その子はさボーっとしてる事が多くてよくいろんな人にぶつかるんだ」

「嘘だろ？嘘だと言ってくれよ」

彼女との出会いが本気で運命的な物だと思っていたらしい幸人は既に泣きそうだった。

何というか哀れというほかない。今回ばかりは同情するよ、その性格に。

「噂では学年の90%は一度は彼女とぶつかっているらしい」

「そんな……。運命的な出会いだと信じていたのに」

「まあ、ドンマイ。お前以外にもそう思った人はたくさんいるらしい」

「そりゃそうだろうな。可愛らしいし優しそうだし、一目惚れしてしまう要素が沢山だ」

俺は可愛い顔だったかなと思って彼女の顔を思い出してみる。

断片的だが浮かんできた彼女の顔は確かに可愛い部類に入る顔だった。

学年トップクラスの美女だと言われる瑞穂と比べても差はないかもしれない。

「畜生、畜生。せめて、もう少し夢を見ていたかった」

「そんなに落ち込むなよ、幸人。いつかもつと素晴らしい出会いがあるさ」

「イケ面のお前に言われても励まされないわ。なあ、春一」

「そこで話を俺に振るな。俺まで不細工みたいじゃないか」

「何だ？じゃあお前は自分がイケ面だと思っているのか？」

「誰もそんな事は言っていない。ただ不細工ではないと言っているだけだ」

「それなら、まあ許してやろう」

何をだよ。そもそもこいつは何様のつもりなのだろうか？

「あ、幸人がぶつかったのてあの人でしょう」

突然、教室の入り口の方を指差して絵里菜がそう言った。

俺達全員がその方向を見ると確かに話に出ていた彼女が教室の前にいた。

彼女は何かを探しているらしくキョロキョロとしている。

そして、何かをみつけたのか顔をにっこりさせてこちらの方へ向かってくる。

「おお、もしかして俺に会いにきたんじゃないか」

この発言はいちいち誰のものか説明する必要もないと思う。

彼女はゆっくりと俺達の方へやってきて俺の目の前で止まった。

「あの、さっきはどうもすいませんでした」

さっきとは勿論、ぶつかった時の事だ。

「別にいいって。それより、どうかしたのか？」

「えっと、さっきぶつかった時にだと思っんですけど。ブレザーの袖ボタンを落としました」

俺は両腕の袖ボタンをチェックしてみると確かに左腕の袖ボタンがなくなっていた。

「あれ、本当だ。どうして分かったの？」

「偶然、私のポケットに入ってみたみたいなので返しにきたんです」

どういふ偶然が重なればこういう事が起きるのだろうと思ひながら俺はお礼を言った。

「わざわざありがとう」

「いえ、ぶつかった私が悪いんですから。それじゃあ私は戻りますね」

「ああ、本当にありがとう」

「いえ、それじゃあ失礼します」

彼女はそう言うのと教室から出て行くとした。

しかし、教室を出る間際にこちらを振り返ってこう言った。

「あの、名前を覚えてもらってもいいですか？」

「えっと、俺は秋月 春一」

「秋月君ですね。私は佐藤 舞です。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく」

「じゃあ今度こそ失礼しますね」

佐藤さんはそう言つと今度こそ教室から出て行つた。

その姿を見て幸人は泣いていた・・・。

Episode 4：美人の家族はやっぱ美人

「春一、どうして俺じゃなくてお前なんだよ？」

「知るかよ。とりあえず幸人、ゆずるのは止めてくれ。気持ち悪くなる」

俺の顔色が少し悪くなったのが分かったのか幸人はすぐに止めてくれた。

以外にも話の分かる奴らしい。

「畜生、畜生。こうなったら、俺はお前に宣戦布告するぜ」

「はあ？いきなり何言ってるんだよ？」

「彼女をかけて俺と勝負だ。今は名前を知られているお前が有利かもしれないが、すぐに俺が逆転してやるよ」

「……まあ、頑張ってくれ」

「何だその余裕ぶりは？俺なんて余裕だったか？」

「誰か助けてくれないか？」

俺は他の3人にそう言ったがそろいもそろって無言だった。

「あんな、幸人。俺はお前と違ってあの子の事を好きでもなんでもない。そんな俺に宣戦布告してどうする？」

「じゃあ、お前は俺の恋の手助けをしてくれるのか？」

「手助けはめんどくさいからしない。でも、応援ぐらいならしてやる」

「今の言葉、しっかりと覚えてるよ」

「分かった。ちゃんと覚えといてやるから、とりあえず黙ってくれ」

どうやらこれで、ウザイ奴は黙ってくれたらしい。

何だか今日の昼休みはいつもの2倍は疲れたような気がする・・・。

午後の3つの授業も終わり、今はもう放課後だ。

部活所属率80%後半を誇る我が学校は部活生の熱気で溢れている気がする。

その中で貴重な帰宅部の俺は今は教室で時間を潰していた。

理由は、同じく帰宅部の瑞穂を待っているだ。用事があるらしく、こうやって待っている訳だ。

先に帰っていたいところだが、待っててと言われてるのではない。

悲しい事実として、彼女には逆らえない。これも全ては世界のどこかにいる両親のせいだ。

「それにしても何してるんだろっなあ・・・」

ついつい思ったことを呟きながら瑞穂の用事とやらを予想してみる。正直、告白ぐらいしか考えられない。っていうか、それで間違いない。

瑞穂は月1ぐらいのペースで告白される。本当はもっとされてもいいが、俺がそれを邪魔している。

毎日、登下校と一緒にする俺は瑞穂の彼氏だと勘違いもされるのだ。それ故に、告白する人が自然と少なくなるわけだ。瑞穂としてはラッキーなのかもしれない。

そんな事を考えていると教室のドアが開き瑞穂が入ってきた。

「ごめん、待たせちゃって」

「いいって、気にするなよ。それより、さっさと帰ろうぜ」
「うん」

そう言うとき瑞穂は机に置いてあった鞆を手にとった。

俺達は2人で教室を出ていつも通り、家へと帰っていった。

時刻は7時半。所謂、夕食時な時間帯であると思う。

俺はいつも通り、家を出て隣の新藤家へと向かう。理由は夕食を食べる為である。

家を出てから30秒からず目的地へ付き俺はインターホンを鳴らした。

鳴らしてから10秒ほど経ってからドアが開き、おばさんが笑顔で出てきた。

「いらつしゃい、春君」

新藤 瑞希。これが瑞穂のお母さんの名前だ。

40ちよつとの年齢とは思えないほど若々しくとっても綺麗だ。

今、見せてくれている笑顔で俺はちよつとドキドキしたりもしてしまう。

さすが、瑞穂のお母さんだけあるというわけだ。

「おばさん、こんばんは」

「さあ、入って」

おばさんに促されて俺は新藤家へと足を踏み入れる。

台所からいい匂いがしてきて、今日の夕食はカレーだなと確信する。

「お兄ちゃん、いらっしやい」

二階へ通じる階段から瑞穂の妹が降りてきて俺にそう言った。

名前は新藤 瑞菜。瑞穂よりも2つ年下で今は中学3年生である。

おばさんの血が流れ瑞穂の妹とだけあって、かなり可愛い顔をしている。

瑞穂同様、もてるらしいが彼女もまた告白を断り続けているらしい。

「あ、そうだ。お兄ちゃん、お姉ちゃんが告白されたの知ってる？」

「予想はしてた。放課後、少し待たされたし」

「相手は誰か気にならないの？」

「別に気にならない。気になっても瑞穂が教えてくれることはないし」

「そうなんだ。今回は凄い人だったのに」

「凄い人？」

「そうそう。知りたい？」

「そう言われると何か知りたくなる」

「どうしようかな。そんなに教えて欲しい」

瑞菜は悪戯をする時のような笑みを浮かべながら俺にそう言うてくる。

何だか嫌な予感がするが、ここまで来たなら一応聞いておきたいものだ。

「教えてほしい」

「じゃあ、1つ条件があるんだけど」

「とりあえず、その条件を言ってくれ。それから考える」

「今週の土曜日にデートして」

「はあ？言ってる意味が分からん」

「分かるでしょ。二人で一緒に出かけようって言ってるの。どうせ、暇でしょ」

「確かに暇ではあるけど」

「じゃあ、いいでしょ。もう決定」

「分かった分かった。じゃあ約束だし教えてくれ」

「いいよ。でも、お姉ちゃんには内緒だからね」

「そんな事分かってる」

「じゃあ、教えてあげる。今回の相手はねえ、西園寺 光先輩だよ」
「なっ、あの西園寺に告白されたのかよ」

西園寺 光。

日本トップクラスの企業である西園寺財閥の一人息子。

その素晴らしく恵まれた家柄に加え、モデル顔負けの顔立ちに、勉強においてもスポーツにおいても全国トップクラスであり、性格も素晴らしいといった非の打ち所のない奴だ。

俺と同じ年であり、現在は生徒会長をも務めている。

去年の文化祭で行われたミスターコンテストでは圧倒的な強さで優勝していた。

確実に学校の女子生徒が結婚したい男性1位であろう。

「びつくりだよな。私も知ったときは驚いたよ」

「そういえば、どうして瑞菜はその事を知ってるんだ？」

「お姉ちゃんの部屋に勝手に入ったとき、ラブレターを見つけたの」
「勝手につて。姉妹とはいえ、不法侵入はどうかと思うけど」

「お兄ちゃんがそう言うなら、これからはしないよ」

「俺はそれがいいと思う。それより、瑞穂は何て返事したのか分からないのか？」

「聞いてはいないけど、断ったと思うよ」

「断ったのか？俺は西園寺を断る人なんていないと思ってたけど」
「・・・・・・。もしかしてお兄ちゃん、お姉ちゃんがOKすると思
ってたの？」

「少しは思ってた。だって、あの西園寺なんだし」

「・・・・・・。私もお姉ちゃんも大変だな」

「何それ？良く分からないんだけど」

「何でもないよ」

なんだか誤魔化されている様に感じながら俺はこれ以上追及はしな
かった。

長年、一緒にいる為にこれ以上追求しても無理だと分かったりする
のだ。

「じゃあ、お兄ちゃんご飯食べに行こう」

瑞菜はそう言う俺の腕に自分の腕を絡めてきた。

いつもの事なので驚きもせず俺はカレーの匂いのする方へと歩き出
した。

Episode 5：新藤家での夕食にて

そこには、おじさんを抜いた新藤家の全員と俺がいた。そう、これからおばさん特性のカレーを食べるということだ。

おばさんのカレーはお世辞抜きに天下一品の味である。

将来は、こんなカレーを作る人と結婚したいと思ったことがあるほどだ。

「どう、春君美味しい？」

「はい。いつも通り美味しいです」

「お兄ちゃんはお母さんのカレー大好きだもんね」

「まあな。昔は本気でこんなカレーを作る人と結婚しようと思ったよ」

「春君、それって私への告白？」

おばさんが悪戯の笑みを浮かべてそう言った。

40を超えてるはずなのにそれが似合うのがまた凄い。少しドキドキしてしまう。

「違いますよ」

「あら、残念。でも、カレーはやっぱ作れて欲しいの？」

「出来るなら作れて欲しいですね。でも、おばさんのカレー並に美味いのは作れる人は少ないと思いますけどね」

「ありがとう。それより、瑞穂も瑞菜も頑張らないとね」

「何言ってるのよ、お母さん。私は別に・・・」

おばさんの言葉に瑞穂は顔を赤らめながらそう言った。

俺としてはまったく状況が読み込めないでいるわけだが。

「えっと、どういう意味なんですか？」

「春君が分かるのもきつともう少し後よ」

おばさんにそういう風にはぐらかされ、俺は何も言えなくなった。

「あ、そうだ。お兄ちゃん、さっきの事で話があるんだけど」

突然、瑞菜がそう言ってきた。

俺はさっきの事が何かも理解できないまま話を促した。

「土曜日のデートで映画館に行きたいんだけど」

「あら、2人はデートに行くの？いつから付き合ったのかしら？」

「付き合ってます。さっき色々あって2人で出かける約束をしたんです」

「お兄ちゃん、私の話は聞いてないの？」

「あ、ごめんごめん。映画だろ？俺は別に構わないけど」

「じゃあ決まり。今から何を見ようか決めよう」

どうやら何を見るのかもあつちに決定権があるらしい。別に構わないが。

そんな事を考えていると瑞穂たちが何かを話しているのが聞こえてきた。

「瑞穂、どうするの？先こされちゃったわよ」

「私は別に・・・そんなじゃないから」

「顔を赤くしてそんな事言われても説得力ないわよ」

「・・・もういい」

なんか良く分からないが瑞穂が最終的に拗ねたのは分かった。その証拠に瑞穂は席を立ち上がり自分の部屋へと戻っていった。

「あ、拗ねちゃった。春君、あとで様子見にいつてくれる？」
「別にいいですよ」

俺はおばさんの頼みごとを承諾しカレーを食べるのを再開した。
何度も言うつようだけどやっぱりおばさんのカレーは美味しいと思う。

カレーを食べ終えた俺は現在、瑞穂の部屋の前に来ていた。
10秒ほど前にノックしたのだが中から声は聞こえてきそうになかった。

どうやら、完璧に機嫌を損ねてしまったらしい。

「瑞穂、入るぞ。中に入ったら着替えの途中とかいう落ちはなしだからな」

そんな事を言いながら俺はドアを開けた。
中を見ると不機嫌な顔でベッドに座っている瑞穂がいた。

「そんなに不機嫌な顔してたら不細工になるぞ」

「・・・・・・・・」

「はぁ……。瑞穂、どうしたんだ？」

「別にどうもしないわ」

「理由もなしに不機嫌になんてならないだろ」

「・・・・・・・・」

「話ぐらい聞いてやるけど。それで何かを解決できる保障はないけど」

「……………お願いを1つ聞いてもらうのは駄目？」

さっきまで黙っていたかと思うと、瑞穂は態度を変えて上目遣いでそう言った。

あまりに突然の変化に不意をつかれ、俺は不覚にも動揺してしまった。

「お願い？聞いてあげられる範囲内ならな」

「日曜日、買い物に付き合っただけだ」

「買い物？別にそんなだったら全然OKだ」

「本当？」

「ああ。でも、買い物はしすぎるな。俺は、そんなに荷物は持っていられないから」

「分かった。じゃあ、約束だからね」

「分かっている。ちゃんと守るって」

良く分からないがどうやら瑞穂の機嫌は直ってくれたようだった。

俺はその後、20分ほど瑞穂と話をして部屋を出た。

一階に下りて俺はキッチンにいるおばさんのところへ向かった。

「あ、おばさん。瑞穂も機嫌直してくれたみたいです」

「あら、案外早かったのね？いつもだったら次の日の朝まで不機嫌なのに。春君、何かしたの？」

「日曜日に出かける約束はしましたけど」

「ふーん。あの子も頑張ってるんだ」

「どういう事ですか？」

「春君にはまだ分からないわよ。それより、ありがとね」

「いいえ。これぐらい、いつでも頼んでください。それじゃあ、俺は帰りますね」

「気をつけて帰ってね。といってもお隣さんだから心配する必要も

ないわね」

「そうですね。それじゃあ、また明日来ます」

「楽しみに待ってるわ」

おばさんはそう言って笑顔で手を振ってくれた。

俺は手を振り替えてから玄関に向かいそのまま新藤家を出た。

そして、家までの短い帰り道の間に俺は1つのことを考えていた。

週末は色々大変そうだと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8444f/>

スクールライフ

2010年11月24日16時21分発行